

## 抄 録

### 原発事故が福島県産の海産物に及ぼした影響

和田敏裕・根本芳春\*・島村信也\*\*・藤田恒雄・水野拓治\*・  
早乙女忠弘\*\*\*・神山享一\*\*\*・森田貴己\*\*\*\*・五十嵐敏\*\*\*\*\*

Effects of the Nuclear Disaster on Marine Products in Fukushima

Toshihiro WADA, Yoshiharu NEMOTO, Shinya SHIMAMURA, Tsuneo FUJITA, Takuji MIZUNO,  
Tadahiro SOHTOME, Kyoichi KAMIYAMA, Takami MORITA and Satoshi IGARASHI

Journal of Environmental Radioactivity 124, 246-254 (2013)

福島第一原子力発電所の事故により大量の放射性物質が海域に流出し、福島県産海産物の安全性に対する懸念が生じた。福島県水産試験場では、2011年4月から2012年10月までに福島沖で採捕された169種6,462検体の放射性物質濃度の分析を行った。放射性ヨウ素 ( $^{131}\text{I}$ ) の暫定規制値 (2,000 Bq/kg) を超えたのは事故直後の2検体のみであった。一方、2011年及び2012年に、それぞれ63種、41種が放射性セシウム ( $^{134}\text{Cs}$ ,  $^{137}\text{Cs}$ ) の基準値 100 Bq/kg を上回った。海産物全体の放射性セシウム濃度は有意に低下したが、セシウム濃度の時系列的な変化は分類群や生息環境、分布域で大きく異なった。高濃度の検体は原発南部の沿岸域で認められた。浮魚類や無脊椎動物の一部、海藻類では放射性セシウム濃度の急速な、あるいは安定的な低下が認められた。一方、沿岸性の底魚類では濃度の低下が遅く、基準値を超える検体が多く認められたことから、底生食物網を介した放射性セシウムの取り込みが継続していると考えられた。底生食物網の放射性セシウムの供給源として、海底土に含まれるデトリタスが示唆された。2012年6月から、放射性セシウム汚染の見られない数種を対象とした試験操業が相馬沖で開始された。風評被害を防ぎ、信頼ある沿岸漁業を再開するためには、福島県沖（特に原発周辺海域）における長期的なモニタリングを注意深く行う必要がある。

---

\* 福島県水産事務所

\*\* 福島県農業総合センター

\*\*\* 福島県水産課

\*\*\*\* 国立研究開発法人水産総合研究センター中央水産研究所

\*\*\*\*\* 公益財団法人福島県栽培漁業協会